

U D L M

10

vol.351

October 31th
2024

もう一つの東京を発見する

p.2 東京ヘテロトピアとは
p.3-9 もう一つの東京
p.10 Of Other Spaces, Heterotopias.

△東洋文庫ミュージアムの江戸大絵図

東京へテロトピア



1. ヴェジハーブサーガ / 2. 聖イグナチオ教会 / 3. 漢陽楼 / 4. 新星学寮 / 5. 東洋文庫ミュージアム / 6. 築地小劇場跡 / 7. ショヒド・ミナール / 8. 東京芸術劇場 / 9. 徳川ビレッジ / 10. ノングインレイ / 11. モモ / パラヒ前 / 12. 東京ジャーミイ

東京へテロトピアとは

「もう一つの東京」に出会う、旅の演劇。

高山明率いる Port B が 2013 年に発表したツアーパフォーマンスを発展させ続け、2015 年に演劇アプリとしてリリースした「東京へテロトピア」。

ガイドブックとラジオを手に、参加者は「東京の中のアジア」20 カ所を自由に旅する。地図に記された場所に辿り着き、ラジオを指定の周波数に合わせると、4 人の詩人・小説家（菅啓次郎、小野正嗣、温又柔、木村友祐）が書き下ろした物語が聞こえてくる。物語の朗読は、多くの場合、日本語を母語としない語り手によってなされている。

見慣れたはずの「トーキョー」を異国のように「旅」する中で、作品は無数の偶然を招き入れ、参加者は自分だけの出会いを重ねる。

今回は 13 人のデザ研メンバーが「もう一つの東京」を見つける旅に出た。普段とちょっと違った組み合わせのメンバーで、自分たちでいきたいスポットを選び、朗読を聞く。そしてこんな質問を投げかけてみた。

- Q.1 東京へテロトピアの朗読を聞く前の、その場所やまちへの印象は？
Q.2 東京へテロトピアの朗読を聞いて、あなたが今回初めて発見した「東京」は？

それぞれが感じた「もう一つの東京」とともに、各スポットを紹介する。

1 御徒町

ヴェジハーブサーガ

Q.1

雑多で年季の入った横丁街で、様々な人が訪れる都市

Q.2

完全に邦人向けにつくられたレストランとのことでしたが、訪れた際は昼休憩のサラリーマンもいたりして日本とインドが同居する独特な空間になっていました。おそらく現地の人にとっては同じ国でも地方が違えばここでの日本人のように異国の人に見えるのかななどと思いました。一方でこうした「異国」も文化的・景観的に街や人に溶け込んでおり、都市的なカオスを形成している点において「東京」の新たな一側面のように感じました。



台東区御徒町の完全菜食インド・レストラン「ヴェジハーブ・サーガ」には、毎晩のようにジャイナ教の人々が集う。インドの宗教であるジャイナ教は完全菜食主義で知られ、ほとんど外食できないため、宝石店を営むラジャ・ラジグルさんが3年前にレストランを開いたのだ。日本人の下に合わせず、インドの味をそのまま再現したことで、逆に日本人のあいだでも人気に火がつき、狭い店内はいつも人でいっぱいだ。

「わたしとジャイナとダイヤモンド」

作：小野 正嗣
朗読：相馬 千秋
旅人：音山 尚大



聖イグナチオ教会

2 四ツ谷

「希望のうた」

作：温 又柔
朗読：ケイ・レヒドール
旅人：東條 秀祐 / 石井 聡太

毎週日曜日、壮麗な聖イグナチオ教会の800席は、多くのフィリピン人で埋まる。在日フィリピン人は今や20万人を超え、「日本のカトリック教会はフィリピン人が支えている」とまで言われる。教会の周囲は、ミサが終わったあとのわずかな時間だけ即席の露店が立ち並び、フィリピンの味が楽しめる。フィリピンとキリスト教は、こうした和やかな光景の彼方に、長く複雑な歴史を築いてきた。

Q.1

聖イグナチオ教会のある四谷は、乗換で使う際に濠による地形の高低差が大きいイメージしかなかった。

Q.2

東京という街は世界屈指の大都市であるのと同時に、個々の（駅まち単位の）小さな町の集合体であることを改めて実感した。サブカル街（秋葉原）や、古本の街（神保町）のように特定の趣味に根付いた街もあれば、今回訪れたようにインドとか、フィリピンとか、特定の民族・国民が集中的に訪れる街もある。そして、当該地がエスニックタウンとして選ばれたのには、複雑な歴史があることを今回発見することができた。（東條）

Q.1

上智大学や迎賓館のあるハイソな町のイメージ。ここにこんなに大きな教会堂があるのは知らなかった。

Q.2

今回発見したのは「カトリック世界の辺境としての東京」だ。朗読は、フィリピンでなされたカトリックに支えられた無血革命についてだった。日本のフィリピン出身の移民の7割は女性で、その増加によって今では東京の教会でのミサの参列者の大きな割合をフィリピン出身者が占めるらしい。中学の頃『塩狩峠』を読んでからキリスト教には自己犠牲的でどこか浮世離れした印象があった。しかし、人口の9割がカトリックのフィリピンにおいて、それはもっと身近で生々しいものなのだろう。教会にさえいけば地元と通底するコミュニティにアクセスできるというのは、異国の地に移住した人にとってどれほどの安心感なのだろう。（石井）

漢陽楼



3

神保町

「神田神保町の獅子頭」

作：管 啓次郎
朗読：李 咄冉
旅人：金 榮俊

「古書店街」として知られる神田神保町は「中華街」の顔ももっている。その神田神保町に100年を超えて店を構えつづけているのが中華料理店「漢陽楼」だ。20世紀初頭、のちに中国の首相を務める周恩来はここに通って、故郷の家庭料理「獅子頭」を食べていた。彼が日本留学のち革命の荒波へ漕ぎ出したことは周知の事実だが、その死後に起きた事件のことは今ではあまり知られていない。

Q.1

神保町に清国・中華民国からの留学生たちの歴史が宿っているとは思わなかった。

Q.2

留学生として、国は違うけれども、他国に来て母国の食べ物が恋しくなる感覚は世界共通であることを改めて感じた。たとえばその人が周恩来みたいな歴史上名だたる偉人であっても、留学生の頃は私とあまり変わらなかったな、という安心感を感じたとも言えよう。漢陽楼の前を10回以上通ってたけど、今回のヘテロトピアまちあるき企画のおかげで、やっと気づくことができた。世の中、いつも灯台下暗しである。

本郷

「アジア、日本、トーキョー」

作：温 又柔
朗読：ナビラ・ブリマ・アヌグラ
旅人：金 榮俊

東京にはすでに50年以上にわたってアジアからの留学生を受け入れてきた場所がある。それが東大正門にほど近い本郷の「新星学寮」だ。過去には民主化運動や軍事政権に対する反政府活動など、複雑な政治的背景を持つ留学生を率先して受け入れ、1960～70年代には、ベトナム、マレーシア、台湾などの留学生の日本在留問題に取り組む拠点ともなった。時代の関心は政治から経済へと移ったが、現在も11名の留学生が生活を送る。

Q.1

本郷エリアに住んでる留学生って少ないんじゃない？という印象を持っていた。

Q.2

留学生向けの「寮」といえば、大学が建てたり、国が運営したり、もしくは宗教団体が運営する施設だと思っていた。しかし、ちゃんと色々な国籍の留学生を迎え入れて育むため、居心地の良いところにこういう寮が古くから存在してたとは思わなかった。しかも東大正門のすぐ近く。やっぱり大学生は大学の近くに住むべきではないかと思う。その街のためにも。

新星学寮



4

本駒込

5

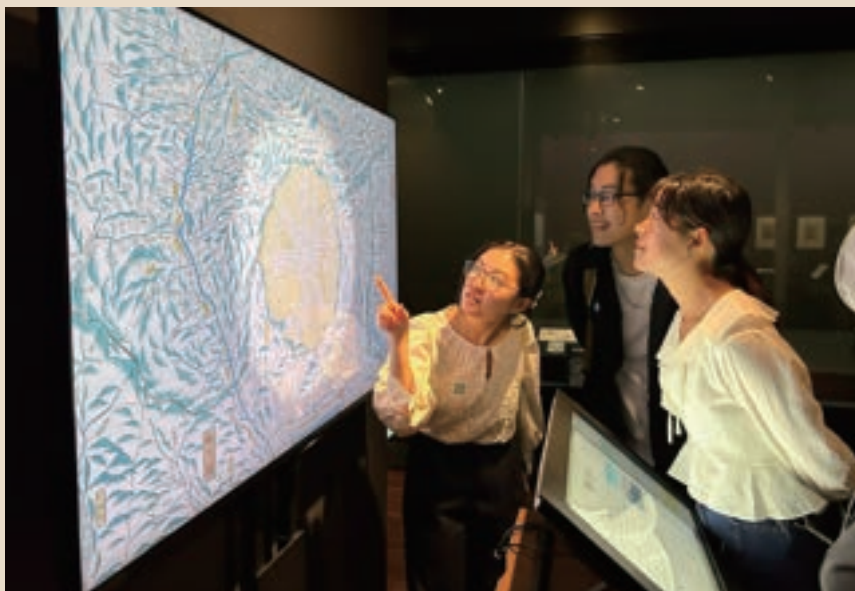
「本の目がきみを見ている、きみを誘う。旅に」

作：管 啓次郎

朗読：管 啓次郎

旅人：Basia Matelowska

文京区本駒込に世界有数の東洋学研究センターがあることをご存知だろうか？三菱財閥の第三代当主・岩崎久彌が設立した「東洋文庫」は、数々の貴重書や、国宝、重要文化財を所蔵し、図書館兼研究所として優れているのみならず、その資料を活かしたすばらしいミュージアム、美しい庭園、居心地のよいカフェを併設し、東京に異なる時間の流れを生み出している。



東洋文庫

ミュージアム

Q.1

I rarely explored Bunkyo-ku, only recently visiting Yanaka for research, then discovering the Museum and its rich collection I hadn't known before.

Q.2

Tokyo Heterotopia's concept is to highlight those spaces in the city that are fundamental to the idea of "foreign", be it people, religions or history and culture. The Toyo Bunko Museum proved amazing source for all of us interested in archival documents especially maps. Treasuring scripts important for minority nationalities in Japan such as Korean and Tibetans. The experience made me think for the first time of the word "Orient" and "Occident" and my own position in the two and the spectrum between them, as an occidental resident in Tokyo.

6

築地

「築地小劇場に引き継がれた朝鮮独立運動」

作：木村友祐

朗読：金 世一

旅人：水野 謙吾 / 永野先生

Q.1

築地といえば市場と本願寺しか知らず、銀座に近い下町というイメージしかありませんでした。

Q.2

「新劇」の起源が東京に、そして築地にある、ということが新しい発見でした。私は宝塚市の出身で、日本の近代劇文化(?)は宝塚が発祥だと勝手に信じていましたし(宝塚中劇場は築地と同年に竣工し、築地小劇場は宝塚中劇場に公演に来たことがあるそうです)、劇のイメージとして下町とは離れた感じがするので、意外だという印象でした(ただ、銀座や日比谷、有楽町に劇場が多いことも築地が起源であることと関係しているなら納得できます)。

でも、この場所にあったからこそ、王道やマジョリティであることに疑いを持ち、自らの信念を発信し続ける日本人や朝鮮人たちが集まり、日本の劇文化に深く影響を与える劇場になったのかなと思います。(水野)

関東大震災への応答として始まり、東京大空襲で焼失するまで、文学的、政治的な実験的作品を数多く上演した築地小劇場。しかしながら、そこに朝鮮の独立運動家が所属していたことは、今ではほとんど知られていない。





シヨヒド・ミナール

池袋西口公園には、バングラデシュの独立、そしてベンガル人のアイデンティティと深く結びつく小さなモニュメント「シヨヒド・ミナール」がある。バングラデシュがまだ東パキスタンだった時代、唯一の公用語をウルドゥー語にしようとする政府に対し、ベンガル語を守る言語運動が起こった。その運動にまつわる記念碑のミニチュア版が実は公園内に据えられているのだ。

7

池袋

「言葉の母が見ていた」

作：管 啓次郎

朗読：タヌスリ・ビスワス

旅人：山田 真帆

・ミナール

Q.1

池袋は何かと訪れる所で、西口公園も区が力を入れて整備したものの1つとしてそれなりに知っていたつもり。

Q.2

池袋にはバングラディッシュ人が多く住む。彼らの母国語—ベンガル語—に関する碑がここにある。

日本で働く外国人と聞いて最初に想起するのはコンビニ店員で、慣れない日本語で懸命に働く姿に勝手に元気もらっている。コロナ禍に近所の店舗で見かけた片言の「消毒しましょ。」という張り紙には、当時の緊張を解くような魅力があり、思わず写真に取ってしまった。だけど、この日本語を書き/話す、彼らの母国語が何かなんて考えたこともなかった。つくづく視点が偏っていると痛感する。

この碑は当初、劇場を背に3ヵ国語の案内板とともに悠然と構えていたが、今は駅を背に植栽に擬態するかのように息をひそめている。異国の地で生きる人々へのまなざしは周縁に追いやられていないだろうか—と、自戒を強めた。

8

池袋

「私たちの革命の

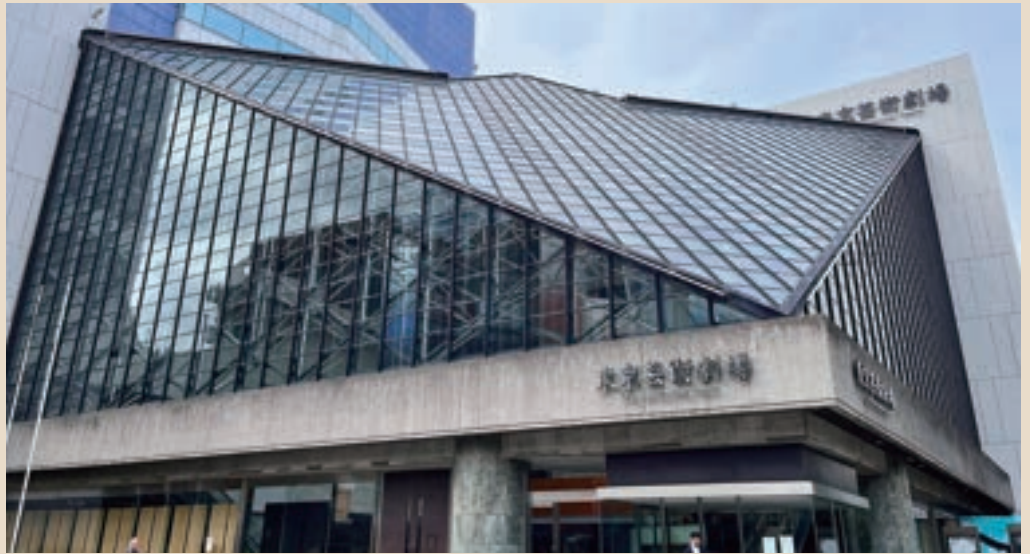
震源たりえた場所で」

作：小野正嗣

朗読：高山 明

旅人：山田 真帆

1990年にオープンした池袋・東京芸術劇場の設立には、日本演劇史に名を残す「築地小劇場」の関係者が参加していた。築地の研究生だった千田是也と、父が経営担当だった浅利慶太だ。「新劇運動の拠点」「プロレタリア演劇の母胎」として知られる築地小劇場は、実は「震災への応答」として作られていた。



Q.1

アート・カルチャー都市の象徴のひとつ。東のHareza、西の芸術劇場？上演演目は全く知らなかった。

Q.2

池袋西口の東京芸術劇場の前に立っているのに、朗読に出てくるのは築地小劇場。今の私にはその意図を正確にはつかむことができなかった。この場所というよりは演劇というものの再発見を試みた。偶然だが、今夏、劇団四季・ウィーンのおペラ・NYのプロドゥエイと、舞台劇を見る機会が多くあった。それまで縁遠かったのだが、迫りに圧倒され、世界観にのめり込み、月並みだが感動した。だから、朗読中に出てくる「自らの思想・言論を表現するための演劇は弾圧された」、その理由も少しだけ理解できる。演劇の持つ力が脅威だったのだろう。エンタメとして、弾圧など気にせずにそれらを楽しめる環境だからこそ、演劇のメッセージを考えながら、改修後の芸術劇場を訪れてみようと思う。

東京 芸術劇場

9

目白

「井鯉こま」

作：ハリマオの咆哮
朗読：アフラ・ラハマン
旅人：松本 望実

JR山手線・目白駅のほど近くに突如広がる住宅地「徳川ビレッジ」。かつてここには壮麗な洋館を構えた尾張徳川家19代当主・徳川義親は、個人で生物学研究所を設け、華族でありながら多くの「革命」に関わり、戦中にはシンガポールで博物館と植物園の総長を務める等、多彩な活動で知られた。

Q.1

目白はあまり訪れる機会がなく、漠然と「閑静な東京の住宅街」というイメージを持っていました。

Q.2

まちを歩いていると突如現れる住宅地「徳川ヴィレッジ」。それぞれの住宅の敷地は広大で、立派な塀や植栽に囲われており圧倒されました。そして、最も特徴的だったのが案内板です。外国人向け住宅地として開発されたことから、現在でも英語表記の案内板や標識が多く存在していました。

朗読は、かつて徳川ヴィレッジに壮麗な洋館を構えた徳川家19代当主・徳川義親に狩られた虎「ハリマオ」が語り手という、ユニークな設定となっています。義親は、病気療養中に滞在したシンガポールにて虎狩を趣味としていたそうです。朗読ではお茶目でユーモアのあるハリマオの語り口と共に、太平洋戦争前後の当時の時代背景も感じることができました。東京・目白からアジアの国々へと、思いを馳せることができました。



徳川

ビレッジ

Q.1

飲食店など店舗が多く、雑多で賑やかなイメージを持っていました。

Q.2

ロング・インレイは、高田馬場の雑居ビルに入るミャンマー(ビルマ)料理店です。タイ料理、ベトナム料理は食べたことがあっても、ミャンマー料理は全く未知の存在だったので、少しドキドキしながらお店に向かいました。

高田馬場駅近くのビル1階にひっそりと存在しているお店には、時折海外の方も出入りしており、現地で使われているであろう言葉も行き交っていました。

朗読は、高田馬場で働くミャンマー人の視点で語られます。このお店で食べるシーンも登場するので、難民として日本に逃れてきた彼らの存在と歴史をリアルに感じながら、美味しくご飯をいただきました。「リトルヤンゴン」と呼ばれる高田馬場で、現在も息づくミャンマーとの繋がりを感ぜられたひとときでした。

10

高田馬場

「リトル・ヤンゴン」

作：木村友祐
朗読：チョー・チョーソー
旅人：松本 望実



ロング・インレイ

ミャンマー・シャン料理店「ロング・インレイ」のある新宿区高田馬場は、駅周辺にミャンマー人が経営する料理店、雑貨店、美容室を集め、同国最大の都市ヤンゴンになぞらえて、「リトル・ヤンゴン」と呼ばれている。かれらの多くは軍事政権が民主化運動を弾圧した1988年以後に日本に渡ってきた難民たちだ。地下鉄東西線沿線で働き、夜は「リトル・ヤンゴン」に戻り、帰宅前には「ロング・インレイ」のある雑居ビル「タックイレブン」に入っていく。

モモ／バラヒ前



11

新大久保

「かのじょの国、ぼくらの言葉」

作：温 又柔
朗読：須貝栄城
旅人：星 葵衣

新宿区新大久保といえば、言わずと知れたコリアタウンだが、実は韓国人以外のアジア人も多い。中でも急速に増えているのがネパール人だ。新大久保で本場のネパール料理を食べたいなら、ネパール居酒屋「モモ」がいい。毎日ネパール人が集まる「モモ」と下の食材店「バラヒ」を営むのは、ジャーナリストのギミレ・ブサンさん。日本唯一のネパール語新聞の編集長で、この春には仲間たちと東京にネパール人学校を設立した。

Q.1

新大久保はコリアンタウンのイメージが強く、ネパール人の存在は意識したことがなかった。

Q.2

異国の都市「東京」でも、ネパール人としてのアイデンティティを必死で保って生きている人々の存在を知った。どの言語で思考し、語るかというのはアイデンティティの大きな要素だ。それでも、どこか他の国に移住するとなると、当然現地の言語を使うよう求められることになる。例えばそれが子どもたちだったらどうだろう。幼いうちに異国の言語だけを使う環境に身を置いていたら、母国語を思い出せなくなる子どももいるらしい。いつかは母国に帰りたいという思いをもつ在日ネパール人たちにとって、日本という異国の中で、ネパール語を学び、ネパール語が聞こえる場所があることは、自分が何者であるかを忘れずに留めさせてくれる大切な要素だと感じた。



東京 ジャーミイ

12

代々木上原

「川のように流れる祈りの声」

作：管 啓次郎
朗読：麻生杏丹紗
旅人：小林 夏月

今や世界で16億人、4人に1人がイスラム教徒の時代と言われるが、実は中東のムスリムはその20%にすぎず、60%が集中しているのはアジアだ。日本全国におよそ80カ所あるイスラム教のモスクのうち、日本最大のものは代々木上原の「東京ジャーミイ」。しかしこのモスクの背後にある在日タタール人の歴史を知る者は少ない。

Q.1

モスクの外観や美しい装飾が印象的で、圧倒された。カリグラフィーが音符のようでもかわいらしい。

Q.2

朗読「川のように流れる祈りの声」では、高校3年生の「私」が初めて東京ジャーミイを訪れた時のエピソードが語られている。朗読を聴き、いつのまにか「私」の目線を通して、普段車窓から見ていたものを目の前にしたときの圧倒される感覚や、モスク内でまるで歌のようにのびやかに響く祈りを追体験していた。東京ジャーミイには以前一度、訪れたことがあり、そのときは東京ヘテロトピアの存在を知らず、ただ建物の美しさに感嘆するばかりだったが、今回のまちあるきでは、建物の歴史を知ると同時に、物語の中に入り込んで、東京のまちなかに突然現れる不思議な祈りの空間をもう一度新鮮に体験することができた。



東洋文庫ミュージアムのデジタル地図の前から動かなくなる私たち。めちゃめちゃテンション上がって、ミュージアムにいた中の半分以上はこの地図を見ていたのでは。自分たちでも都市工学生すぎと思った。笑
富士吉田も上野も見つけたし、韓国の書物はキムさんの解説付きで見れたし、とても満足度の高い時間でした。(木村)



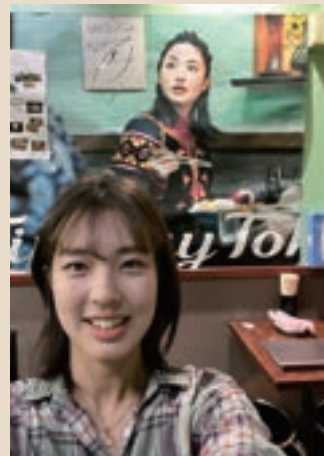
駅から東京ジャーミイへ向かう道中でピナーを発見し、朝10時から「飲みたいですね〜」と話す石井君。(小林)

一緒に回った石井くんは昼からネパールビールを嗜んでいました。(星)



いつも通過はするものの降りたことはなかった目白駅に初めて降り立った。私にとっては未踏のエリアで、独特な雰囲気を楽しめたと、今まで降りなかった理由もなんとなく感じた。笑 次に目白に行くのはいつになるかはわからない。のんちゃんが終始案内をしてくれたのだが、休憩場所として選んでくれた目白庭園がとてもいい場所だった。池を眺めながら一息ついていい時間を過ごした。(山田)

東京メトロのCMで石原さとみが来たらしく、お店の壁にポスターとサインが貼ってありました。やまほさんの自撮りとともにお送りします。(松本)



イグナチオ教会と隣接する上智大学にも訪れたが、立派な都心型キャンパスだと思った。地方の高校生だったら憧れを覚えそう。(東條)



普近くにお住まいだったこともある永野先生と築地朝一番まち歩きをしたこと。先生が鍋の材料の買い出しでよく訪れたというお店や吉野家一号店(跡)の再訪、波除神社の参拝、また再開発が進む現場を柵の間から覗き見…。外国人観光客が9割を占める中で、明らかに誰よりも怪しい動きをしていた2人だったと思います(笑)
そして、まち歩きの終わりには名物卵焼きと海鮮丼をご馳走になりました…！今年一豪華な朝ごはんでした(笑)
(水野)

ヘテロトピア

Heterotopia

・2024/01/18, Special Lecture + Talk Session "Tokyo Heterotopia" 10 Years and Beyond - Invisibile Theater, City and Tourism around Heterotopia, <https://gaup.gaidai.ac.jp/2023/12/heterotopia-lecture/>

ヘテロトピア (Heterotopia) とは

ここまで「異郷」という語を当てはめ、ヘテロトピアという言葉を使ってきたが、改めてヘテロトピア(Heterotopia)とは何か？

ヘテロトピアは、哲学者ミシェル・フーコーが1967年に考案した概念で、直訳すると「**他なる場所(Of Other Spaces)**」となる。

接頭語のheteroは、古代ギリシア語で「他の、別の、異なった」を意味する「*ἕτερος* (héteros)」に由来し、古代ギリシア語で「場所」を意味する「*τόπος* (topos)」と組み合わせられてきた言葉である。

ここで、もう少し耳慣れたユートピアという言葉と対比して考えてみる。「理想郷」を意味するユートピア(Utopia)は、コルビジェの輝ける都市のように、完成された社会のイメージであるが、いかなる場所にも存在しえない。一方ヘテロトピアには、**相互に異質な複数の空間および時間が、現実世界の一つの場所に並置されて存在する**という特徴がある。

ユートピア	ヘテロトピア
<ul style="list-style-type: none"> ・非場所性 ・言語依存 ・非現実的 ・完成されたイメージ 	<ul style="list-style-type: none"> ・空間性 ・時間性 ・現実世界 ・複数性 ・異質性

ヘテロトピアという概念は、都市空間において、**専制的に固定化された文化的・社会的・政治的・経済的なものごとを問い直す**際に人文地理学などの分野で言及されることが多い。

- ・ Foucault, Michel. "Of Other Spaces, Heterotopias." Translated from Architecture, Mouvement, Continuité no. 5 (1984): 46-49
- ・ 今村淳. "可視的なものと不可視的なもの—フーコーの絵画論の含意—" 人社研25号(2019): 85-97
- ・ 加藤政洋. "「他なる空間」のあわいに: ミシェル・フーコーの「ヘテロトピア」をめぐる" 空間・社会・地理思想. 3巻(1998): 1-17

見えているものの不可視性の覚知

フーコーの絵画論では、**芸術とは見えているものの不可視性の覚知を促す**ものであり、現実の世界における専制的に固定化された物事を原理的に問いなおす行為として捉えられる。



ベラスケス 《ラス・メニーナス》

《ラス・メニーナス》には王女だけでなく、**作者を取り巻く空間全体(現実の世界)の表象関係が描かれている**。また中央の鏡には、国王夫妻が映っているが、国王夫妻がいる場所は、芸術家のいた場所であり、かつ鑑賞者のいる場所でもあると気づかされる。フーコーは、**絵の表象とは、絵(=鏡)のまにに無限にひろがる、見えているはずなのに見えていないもの(=鑑賞者のいる場所)の存在を示唆**することであると論じている。

ここで注意されたいのは、芸術とは見えないものを見る化する行為ではなく、**あくまで見えている(はずだと私たちが思っている)ものには、実際には見えていない部分があり**

その見えなさ・見えにくさ(自体)を実感する行為であるという点である。

ヘテロトピアは、相互に異質な複数の空間および時間が現実世界の一つの場所に並存するという概念であり、翻ってそれは、**私たちがすでに知っていると思っているがゆえに知らない、もう一つの他の現実世界が広がっている**ことを示しているといえる。

「もう一つの東京」を「発見」する

さて、小難しい話をしてきたが、これまでの議論を、今回デザ研メンバーで体験した**東京ヘテロトピア**に置き換えて考えてみよう。

神保町、御茶ノ水、築地...と聞くと、それぞれ何度か行ったことがあり、すでになんとなくその町のイメージというものもある。しかし、それらの中には、**かつてアジアから来た留学生や移民、難民たちの記憶の痕跡が残る場所**が今も存在する。東京ヘテロトピアでは、それらの場所が**東京の中の「異郷=ヘテロトピア」**に立てられている。

私たちはアプリに従い、それらを訪れ、朗読を聞き「**もう一つの東京**」を「発見」してきた。それは、**知っていると思っていたはずの知らないものに出会う経験**だったということができる。

もう一つの東京を発見する

Of Other Spaces

COLUMN

WEB MAGAZINE

不忍通り車道活用実験



上野プロジェクト

昨年に引き続き、不忍通りと上野公園の一部を一体的に活用し、ブックカフェを開催しました！昨年見られなかった数々の風景を目の当たりにし、また一歩、理想的な池のほとりに近づきました。(M2 水野)

続きはコチラ >>>

<https://ud.t.u-tokyo.ac.jp/ja/blog/>



まちにワークショップ

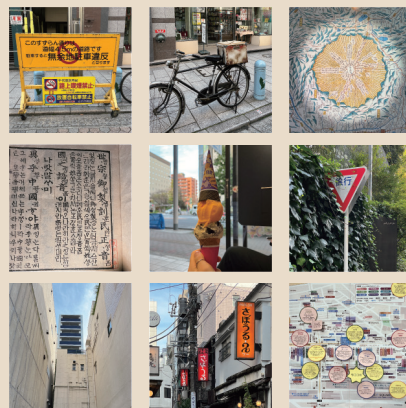


宇治プロジェクト

「食」をテーマとした第3回まちにわWSは、料理教室、規格外野菜や地元高校生の開発したお菓子の販売やBBQなど過去最多かつ多様な出店に。多くの方に来場いただき、食欲の秋を満喫しました！(M2 山田)

MACHI BINGO

マガジン片手に、まちを歩こう



神保町、本駒込など

・東洋文庫ミュージアムで昔のハンゲルには△(Zの発音)があることを金さんから教わった。さぼうはおすすめのお茶店。Basiaと協力して上下反転アイスを作って遊んだ。機能を果たしているか分からない生垣に埋もれた徐行看板も推し。(M2 洲崎)

10月号担当
M1 木村千咲



今回は久々のまちあるき企画ということで、それぞれ楽しそうに巡っていて、エピソードを聞くのも面白かったです。初めてマガジン担当をやってみて、デザインって難しいなと思いつつも、楽しくたくさん学ぶ機会になりました。そして副担の洲崎さんには夜遅くまで校正してもらったりとてもお世話になりました...！笑